平成22年度
犯罪被害者週間「県民のつどい」

犯罪被害者等の手記

第２集

秋　　田　　県
秋　田　県　警　察
（社）秋田被害者支援センター

はじめに

安全で安心して暮らせる社会の実現に向け、秋田県内で犯罪や交通事故等を防止する様々な取組を行ってきた結果、犯罪等は減少しつつあります。しかし、依然として犯罪等に巻き込まれる方は後を絶たず、被害を受けた方々や御家族、御遺族は、直接的な被害のみならず、その後も精神面・経済面などにおいて苦しめられることが少なくありません。

このため、県では、平成十八年二月に「秋田県犯罪被害者等支援基本計画」を策定し、関係機関・団体等と一体となって支援施策等の推進に努めております。この一環として、犯罪被害者等の置かれている現状や支援の必要性について県民の皆様に理解を深めていただくため、犯罪被害者週間に、毎年「県民のつどい」を開催しております。

平成十九年に犯罪被害者等の方々の手記集を作成し、「県民のつどい」で朗読させていただきました。今回は、殺人事件や交通死亡事故の被害者の御家族八名の方々から手記が寄せられ、第二集として発刊することができました。多くの方々にこの手記集を御覧いただき、犯罪被害者等に対する理解を深め、地域が一体となって、犯罪防止や犯罪被害者のために何ができるのかを考えるきっかけにしていただければ幸いです。

最後に、辛い心情を手記に表してくださった犯罪被害者等の皆様に対し、心から敬意と感謝を申し上げます。

※手記は原文のまま掲載しました。

平成二十二年十一月

秋田県警察

秋田県

（社）秋田被害者支援センター

目　次

一　悲しみの年輪　……匿　名……1
二　息子の笑い声が消えた日　……佐々木　たい子……6
三　遺族のメンタルヘルス障害　……匿　名……8
四　変わらぬ思い　……熊谷　文子……16
五　五回目の春がすぎた今　……匿　名……21
六　娘の被害から学んだこと感じたこと　……三浦　芳子……23
七　美貴・真美　……匿　名……26
八　命　……堀江　まさ子……28

悲しみの年輪

匿　　名

ちょうど三十年前の夏、関西にある主人の経営していた土建会社は経営に行き詰まり、破産手続きをしている時、弁護士事務所に行った帰り、主人は下請け業者にら致され、凄惨なリンチを受け、その日のうちに殺害されました。

人伝てに主人が下請け業者に捕まったと聞き、生まれたばかりの娘と、四才と三才の息子の手を引き、肩におしめとミルクの入ったバックを下げ、炎天下を毎日の様に警察に、「主人を捜して欲しい。」と、頼みに歩く日々。しかし、担当官は、「それならば、その捕まったという場所へ、案内してみろ。」の、一点張りでした。

困り果てた私は、ら致したといわれる業者（結局、その人達が犯人でした）に会い、会話を録音し、新聞社に訴えました。が、進展はありませんでした。

警察も、弁護士も、親戚の人も、「（主人は）外国に逃げているのだと思うし、ほとぼりが冷めた時に戻ってくるから、三人の子供をしっかり育てる事に専念しなさい。」という人がほとんどで、私は全く孤立無援に、子供を連れて、警察に行く、という日々でした。

主人は仕事の話は全くしませんでしたが、とても家庭を大事にし、子供をかわいがって居りました。又、大学を中退後、ほとんど、自分の努力だけで土建業を始め、大変な努力

家、仕事熱心な人で、私はそんな主人を、とても尊敬してましたから、いくら経営に行き詰まったとはいえ、ほとぼりの冷めるまで、外国へ逃げるという事は考えられません。きっと、再起の計画も胸にちゃんとあると思いましたが、その主人が家族に全く連絡を寄こさないのは、ら致された後、大変な事が起こったに違いない、と、考える様になりました。

考えたくない、一番考えたくない事態ですが、夏も過ぎ、秋風が吹き始めると、たまらない気持ちで一杯でした。

その間も、あい変わらず、三人の子供を連れて警察に行きました。

もし、万一、考えたくはないけれど、ら致された後、どこかへ埋められていたら、犯人が話さない限り、主人の居場所は永遠に分からないと思うと、この世には神も仏も無いのかと、夜、子供達が寝た後一人で泣いていました。

犯人が捕まったのは、全くの偶然でした。八月七日、弁護士事務所を出たところで捕まり、下請け業者が雇った元プロレスラーに、ろっ骨を三本も折られ、両手の爪は全部、はがされていました。

警察から、犯人が白状したと聞いたのは、十一月十七日だったと思います。私は何とか、あれ程、子煩悩だった主人を、一晩で良いから、自宅で、子供達の側で眠らせたいと思いましたが、死体は死後三ヶ月以上経過して居り、とても自宅には連れて行かれる状態では無いと言われました。

あんな悲しいことはありません。

しばらくの間は、お骨を前にして、主人に「どうか生き返って欲しい。何とか生き返って欲しい。生き返らせる方法は無いものか。世界中を捜したらある筈だ。」と、そればかりを考え続けていました。

とても、普通に子供の為に食事を作って…という事は出来ませんでした。まともに、子

供に食事を作らなかった為でしょうか。長男は、ひどい虫歯になり、奥歯を半分も抜く事になり、済まないと思います。

長男には父親の想い出があります。が、下の次男にはかすかに、又、娘には全くありません。しばらくの間、子供達には、主人が、死んだという事は、知らせませんでした。でも、何年も父親が家に帰って来ないのに不信を持った長男が、「パパは死んだんでしょ。僕、パパのゆうれいでもいいから、パパに会いたい。」と泣いた時程、つらい事はありませんでした。

自分の悲しみだけにひたっている事は許されない日々ですが、私は悲しみの中に埋没してゆきました。

主犯の一人は、事件後一年位で、白血病で死亡してます。実行犯の弟の刑は十五年と、新聞で知りました。よほどひどい事をした刑でも、重いもので八年位と思うのに、十五年とは、よっぽどひどい事を主人に加えたと思います。こんな悲しみの日々を、生きて行くのは、もう生きている、というよりは、半分あの世を、ただよっている様なものでした。

事件から十年位した頃、犯人から私に、「償いをしたい。」と、申し出がありました。「今、できる事は月に一～二万だが、出所後はまじめに働いて、私達親子の暮らしが立つ様に、頑張りたい。」との申し出がありました。

明らかに、仮出所が間近になり、刑務官の心証を良くする為の一時逃れとしか思われないのですが、事件から十年経ち、子供達は、中学生二人、小学校高学年一人と、どうしようも無い程お金に困っていた私は、その案を受け入れました。この一万円があれば、当座お米が買える。それだけでした。結局、犯人は、一年位は仕送りをしてきましたが、その後は全くありません。

この様な日々が続くうちに、少しずつ、少しずつ死にたいと思い始め、気がついた時には、頭の中は死ぬ事で一杯でした。早く、こ

の悲しみから逃れ、主人の元へ行くのが、唯一の希望でした。だから、朝、目が覚めると自分がまだ生きているのがわかり、悲しい一日が始まりました。

経済的にも困窮の極みでした。

主人が殺されてからの日々は、まるで、泥舟に乗って、まっ暗な暴風雨の海を漂流している様なものでした。殺された主人もかわいそうだし、子供達もかわいそう、そして、何よりも、運命の軌跡が、犯人と出会ってしまった事が、一番残念でした。

長い長い、死ぬ事のみを考えていたウツは、もし、今、私が死んだら、子供達には主人が殺された事を教えていないので、それが明るみに出る可能性があります。それは、子供達の運命に決して良い結果とはならない、という恐怖でした。何とかして、はい上がらねばならないと思ったら、ウツからは脱出しました。私の場合は、ウツよりも強いというか、深い悲しみが、私を救い上げました。

しかし、決して強くなったわけでもありませんし、たくましくなったわけでもありません。

ただ、普通の人が体験しない事を体験し、経験しない事を経験した事で、犯人を憎む事は、決してしない様にしようと思いました。

いつの日か、息子も娘も、父親の殺された事を知るでしょう。その時、大変な想いをし悲しみ、苦しみを乗り越えて、生きて来た私の生き方が、少しでも役に立てば…と、思います。

今、振り返ってみると、事件直後、小さい子供達に、満足に食事を作れなかった事が、くやまれます。

そこで、国として、行政として、こうした犯罪被害者には、せめて事件後一～二年の間、食事支援サービスとかを立法化できないでしょうか。とても、非日常な、そして悲惨な事件の後、食事の仕度という事は、ほとんど、不可能なことでした。

又、主人は社会保険に加入して居りましたが、主人が殺される三～四日前に、弁護士が社会保険事務所で、脱会手続きを済ませ、私は葬儀費用として、一ヶ月の給料を貰ったのみです。

そこからつらいつらい、なかなか立ち直れない日々が始まりました。

今、犯罪被害に遭う、交通事故に遭う、というのは、何も特殊な人に起こる事例ではなく、明日、ひょっとしたら、誰にでも起こり得る状況だと思います。

私は、社会保険事務所の人に「事件が、もう少し早く起こっていれば、遺族年金が貰えていたのに、運が悪かったとしか、言い様がありません。」と言われました。

あれから三十年経ち、犯罪被害者達の悲惨な状態もメディアが少しずつ取り上げ、世間に知られる様になり、政府も重い腰を上げてきた様に見えます。

でも、私の様に、三～四日違いで遺族年金の対象とならず、それからの地の底を這う様な生活をしている者も居ります。もう少し、キメ細かく、この様な場合、特例によって、運の悪い人を救い出す様にして欲しいと思います。

息子の笑い声が消えた日

佐々木　たい子

平成二十年十月、軽乗用車と大型トラックが衝突しました。軽乗用車の助手席に同乗していた二十三歳の息子は、約十一時間半後に脳挫傷のため死亡しました。現場は信号のない見通しのよい交差点で、軽乗用車側に一時停止の標識があったのですが、左右の安全を確認しないまま進行し、左から来たトラックが軽乗用車の左側面に衝突したという事故でした。

息子は明るく人を笑わせることが好きでした。息子は介護士でした。仕事も三年目になり、ようやく慣れはじめて、ようやく自信が持てるようになっていました。結婚の約束をした人もいて、息子の人生は夢と希望に満ちていたと思います。何もかもがこれからでした。

たった一人の息子を亡くした私たちに、夢も希望もありません。夫は仕事から帰ってくると、食事の前に一本のビールを持って来て、息子のコップと自分のコップに注いで、仏壇の前で飲むのが毎日の日課です。息子の写真を見ながら今日の出来事やいろいろな事を話します。でも最後は、どうして息子の笑い声が聞こえないのか、どうして走り廻る息子の姿を見る事が出来ないのか、どうして息子にさわる事が出来ないのか、どうしてこんな事になってしまったのか、どうして、どうしてと思ってしまいます。

息子の事故は裁判になりましたが、全くはじめてのことでぜんぜん分かりませんでした。そんな時、被害者支援の皆さんに会えて、判決の日に裁判に行くことが出来ました。判決を聞けた事、傍に居てくれた事、どんなに心強かったかわかりません。本当にありがとうございます。感謝しています。

加害者への思いは、書ききれません。最低限の交通ルールである左右の確認や一時停止標識で止まること等を守っていれば、こんな事故はあり得ませんし、起こらなかったと思います。思いがけない事故が起こる事があるのです。

交通事故は人ごとだと思わず、もっと身近に感じてほしいと思います。通い慣れた道こそ、再度確認してほしいと思います。

遺族のメンタルヘルス障害

匿　　名

母は大正十X年生まれで生涯、貧農の生活そのものでした。朝は暗いうちから田圃に向かい、帰宅は暗くなってからでした。郷土資料館でしか見ることができなくなった写真のように腰まで田圃の中に浸かり田植えをしたり、霰が降る最中に稲刈りをしたことも少なくありませんでした。農業収入だけでは生活が苦しく、農閑期は工場勤務やハタハタ寿し作りを手伝ったりしながら生活を支えてきました。子供たちが社会人になってからは多少、生活にも余裕がでてきていたように思いますが、貧乏性が抜けきれず、ゆっくり休養している姿はほとんど見たことがありません。米作りを止めてからも春は山菜採り、それが終われば畑仕事、山林仕事と体を動かしているのが常でした。畑仕事である野菜作りは自宅で食べるよりも近所や親戚に食べてもらうことを喜びとしていたようです。大正、昭和、平成を駆け抜けてきた八十才を過ぎた母は逞しく、誰も頼らずバスで通院し、金融機関にも自分ひとりで行ってました。土曜日なら病院に送っていけるよと言っても、キャッシュカードがあればいつでも金融機関で入出金できると言っても「自分が動けるうちは自分でやるから」と答えるのが常でした。

母の兄弟は昨年、米寿を迎えた長女、八十台半ばの次女、七十台後半の四女と長寿系統で母も米寿まで健在であると確信していまし

た。「今まで苦労したのだから自分の好きなものに年金は全部使った方が良いよ」と言っても、自分のためにはほとんど使わずに孫達に小遣いをあげることを楽しみにしていました。

母の子供は同居している私を除けば、遠方に住んでいます。父が亡くなった翌年、二泊三日でA地方に行きました。その翌年には母の兄弟、父の兄弟等も住んでいるB地方に行きました。そして、次回は長男や孫（長男の子供）が住んでいるC地方に行こうと話していたのですが。

二〇〇X年YY月ZZ日は父の月命日でした。母はいつもの仏飯器ではなく霊供膳を仏前に供え父に何やら話しかけていました。私は仏前に礼拝し母にいつも通り「火の始末と戸締り」の言葉をかけ出勤しました。

十一時前に母が交通事故にあったとの連絡を社内関連部門からありました。その直後に自宅に居る妻からも同様の電話がありました。自宅に帰り、搬送先の病院に向かいました。意識はあるとのことで病院到着までは悲観していませんでした。

警察署交通課の方に状況説明を受け、検査・処置中の母と対面しました。道路の左右を確認してからの道路横断中に事故にあったことが分かりました。一方で変わり果てた母の姿に驚きました。顔のいたるところがどす黒い紫色に腫上っていました。

処置室で医師の説明を受けました。概要は次の通りで長期入院、車いす生活はさけられないとのことでした。

（一）肋骨骨折
（二）背骨胸推圧迫骨折　二ヶ月
（三）左足骨折
（四）右足膝上骨折
（五）肺挫傷
（六）左目上のこぶ

入院に必要なタオルや下着を準備するため帰宅しようとしました。その直前に吐いたり、

「こぇこぇ」「さびぃさびぃ」の言葉を発している母が気になりながらも入院準備のため帰宅しました。

自宅で入院時に必要と思われるものを探し持参し、十五時頃に指定された入院病棟に到着しましたが、そこには居ませんでした。容態が急変しＩＣＵに移動したことを知らされました。ＩＣＵ医師から最初に言われた言葉は「予断を許さぬ状況であり呼吸がいったん停止した」ということでした。近くにいる母の兄弟に連絡し来てもらいました。母の兄弟がＩＣＵに入った時は意識があり危険状態ながらも安定方向にあると思い、少し、安堵しました。安定方向にあることに安心し母の兄弟には帰ってもらいました。その直後（十ｘ時頃）、再度、容態が更に急変しました。母の兄弟への連絡と共に遠方に住む私の兄弟に電話しました。ＩＣＵに戻り医師に人工呼吸をしてもらい、私は母の手や足を摩りながらディスプレーの数値や波形を見つめながら母を励まし続けました。ディスプレーの数値が「ゼロ」を表示し波形の動きもなくなり、一ｙ時ｚｚ分に臨終を告げられました。臨終を信じることができず、数値と波形が動き出すことを期待して母とディスプレーに釘付けになっていました。

看護師に死装束着替えの立会い可否を尋ねられました。当然、立ち会うことを伝えながらも事故の衝撃を物語るように母の体のいたるところに内出血の跡がありました。

母は葬儀社の車で私は自分の車で帰宅しました。母の兄弟にも自宅に寄ってもらい葬儀の準備を話し合ったと思いますが何時頃までどんなことを話したかは記憶がありません。母が事故直前に注文した肥料がＪＡから届いていましたが、その処置も記憶がありません。

ほとんど寝てない状態で翌日を迎え、菩提寺、本家、分家に連絡し、菩提寺住職から七時前に読経してもらい葬儀日程を決めました。遠方に住む両親の兄弟や私の子供達に電

話で母の死を伝えました。遠方に住む両親の兄弟や私の兄弟を迎える準備、葬儀関連の連絡及び問い合わせで緊張の連続でした。

納棺、火葬、通夜、初七日等はあっという間に過ぎていきました。母の死は突然の事故でも平静を装っていましたが、粗相、失念、取り乱しが少なくないことに自分自身で気がついていました。葬儀、お斉等での挨拶では事故には一切触れずに天寿を全うしたことにし、自分にもそのように言い聞かせました。一方で、私の兄弟は口々に運転したくないことを発していました。

葬儀後、言葉では表現が難しい放心状態、虚脱感、憔悴感と共に今までに経験したことがない疲労が私を襲ってきました。規定の休日の間は役所関連の手続きを含め葬儀の後始末に追われました。不眠、頭重（頭痛）が続き心療内科を受診しました。最初の診察でもらった薬は体が非常にだるくなり、主治医に相談し一日分を半分にして薬を飲んでいました。菩提寺住職が七日ごとに来宅し読経してもらう中陰供養は仕事を優先し妻に頼みました。仕事に集中することで母の死を忘れようと努めましたが、今になって考えると中陰供養に対応しなかった親不幸を悔やんでいます。

仕事に集中することで母の死を忘れようとしましたが、無気力、無関心、無感動、注意力散漫、失念、記憶困難、思考力低下、判断力低下、投げやりな行動等が多くなり体重が減少し動作も鈍くなり、夏の暑い日でも足が冷え、首・耳・額周辺に湿疹が目立つようになり心身の変調が加速していきました。仕事上の間違い、勘違い、物忘れが桁違いに増えました。このような状況ですので仕事の効率が悪く、苦情を受けることも少なくなく悪循環の繰り返しが続くようになりました。

休日は母の遺物（衣類、生活道具、農具）の整理をしましたが、空しく、胸が苦しくなり、落ち込みが大きくなるだけで未だに終

わっていません。

私の心身の変調とは関係なく四十九日法要、新盆等仏事をこなしていかなければなりませんでした。事故であることから警察での事情聴取、保険会社との折衝、役所の手続き、検察庁への対応等が初冬まで続きその度に母のことを思い出し精神的障害は緩和されることなく心身の機能・能力が低下し翌春には耳鳴りにも悩まされることが多く、また、足が冷たいのに背中にはぐっしょりと汗をかくという今まで経験したことがない現象が心身にでるようになりました。更にＰＣ（パーソナルコンピューター）を使っているときに頭重（頭痛）を感じるようになってきました。とても仕事ができる状態になく翌年〇月から三ヵ月間休みを取り、療養することにしました。

三ヵ月間の療養で心身の障害がかなり改善し復職したのが△月中旬でした。私自身は回復したつもりでいましたが、新たな症状が現れるようになりました。それは親戚・友人の新盆参り時に顕在化しました。車運転中に激しい頭重（頭痛）に襲われ、運転そのものが恐くなりました。頭重（頭痛）は運転後も続きました。それ以降、可能な限り、運転は控え、やむを得ず運転する場合も必ず同乗者を共にするようにしています。

時を同じくしてＰＣ使用時の頭重（頭痛）にも異変が現れました。ＰＣ使用時間と共に頭重（頭痛）が激しくなる現象でした。①頭重（頭痛）②もう一人の自分がＰＣ使用を止めさせようとするかのような更に激しい頭重（頭痛）③垂直直下型地震のような強烈な頭重（頭痛）が繰り返されるようになりました。①②③の順序が、秋口にはＰＣ起動直後に②又は③の現象が起きるようになりました。更に、自宅でのＴＶ観賞時に③の現象が突然、でました。まるで自分の心身に魔物が住んでいるような状態でした。しばらくこの原因が分からず、不安の日々が続きました。ある時、

ＩＣＵでの出来事を思い出し、主治医に関連を尋ねたところ、大いに関係ありとの見解でした。自分の心身に尋常でない不気味な現象が起きていることに危機以上のものを感じ、普通の疾患ではないことも感じ取っていました。この頃は二度目の療養に入っていました。

母の三回忌の準備をしようとしていた矢先に警察での事情聴取時に貰った冊子を見つけました。その中に被害者支援室があることが分かり電話しました。主治医に私の症状及び想いがきちんと伝わっているかを問われ「はっ」としました。事故の状況、症状及び私の想いを整理し主治医に再度伝えました。

主治医は「これで全容が分かった。〇〇〇〇〇〇〇障害である。」と言い、次の症状にあることが診断されました。

一　侵入（intrusion）が起きている
二　意識変容を起こしている
三　聞いたことが残らない
四　記憶が困難である

これらは母の交通事故死及び病院（ＩＣＵ）での異常な状況に対する正常な反応であることが説明されました。本人の意思とは関係なく侵入現象が発生し母の交通事故及び病院（ＩＣＵ）と同じ気持ち、状況が蘇るものであることが少しずつ分かってきました。自分一人では症状を正しく伝えることが難しいと考え、診察時は妻を同行させるようにしました。

更に、主治医から、右記症状は「全身全霊の反応であり自己防衛である。これらの反応（症状）がなければ心臓発作を起こすか、発狂している。幼児返りする人もいる。」と諭されました。

また、被害者支援室カウンセラーによると、私のような疾患は遺族に起きる確率が大きく、車の運転をやめる遺族がいるようです。また、記憶が抜けたり、記憶の順序に矛盾が生じる方もいるようです。

自分自身が何かをしなければ、心身の機

能・能力がどんどん劣化していくことが心配になってきました。高校受験用の計算問題集を開いた時に飛行機離発着時の轟音のような激しい頭重（頭痛）に襲われました。それでも心身の機能・能力回復のリハビリテーションとして高校受験用テキスト等を中心に漢字、計算、英語を少しずつこなしているのが現在です。しかしながら、心身の機能・能力回復のリハビリテーション開始直後は大変でした。母の交通事故後に繰り上がり・繰り下がりのある二桁の計算ができない、簡単な英単語スペルがでてこない、間違い・勘違い・物忘れが桁違いに増えた原因がなんとなく理解できるようになりました。同時に心身の機能・能力が予想以上に落ちていることを再認識し失望しました。それでも、机に向かう時間を少しずつ増やし、多少は心身の機能・能力が回復途上にあると思います。ＰＣ操作練習も始めました。起動後、一～二分で侵入に襲われますが頭重（頭痛）と戦いながらも抵抗力をつける目的で一日あたりの操作時間を決め継続中です。ＴＶには背中を向けています。ＴＶ観賞は一週間に一時間だけです。恐くて画面の直視は三分と続きません。

侵入現象の要因は①車、②ディスプレー（ＰＣ／ＴＶ等）、③病院、④仏事関連（葬儀社・車含む）、⑤救急車、⑥母に関係すること⑦その他等です。日常生活の中で避けられない当たり前のことばかりです。彼岸の墓参り後に侵入現象が出ました。また、私の疾患は気候変動の影響を受けやすいことも分かってきました。九月中旬からレッグウォマーを着用する日もあります。

私の疾患は周囲の人には「ひやみこき（怠け者）」にしか見えないでしょう。何度か、会社を辞めること、人間をやめることを考えました。企業の中では「聞こえよがしにもともと能力がないのではと揶揄する人」、「これ見よがしに脅迫する人」、「暴言を吐く人」、「親が亡くなったくらいで仕事に支障をきたすの

はおかしいと攻める人」がいました。これらは針の莚以上に辛いものです。

長い目で見れば回復してきています。しかしながら、完全回復（心身の機能・能力が事故前と同じ）というゴールはまだ、見えません。完全回復はいつになるか分かりませんが、「がんばらない」、「あきらめない」、「希望は捨てない」をモットーにして主治医、被害者支援室カウンセラーの診察及びアドバイスと共にリハビリテーションを継続しています。

このような辛い思いをするのは私を最後にしてもらいたいものです。

＊本手記はリハビリテーションを兼ね、侵入（Intrusion）現象の頭重（頭痛）と苦闘しながらＰＣ上で作成しています。

乱筆、乱文、誤字、脱字はご勘弁願います。

変わらぬ思い

熊谷文子

私は黄色いカバーをつけたランドセルを背負った小学校一年生の息子を学校からの帰り道、交通事故で失いました。七つの誕生日を迎えて間もなくのことでした。あれからもうすぐ五年経とうとしていますが、一日だって息子のことを考えない日はありません。同級生だった子どもさん達は六年生になり、最後の小学校生活を過ごしています。自分の息子もみんなと一緒に成長しているのだと自分で自分を励まし、通っていた小学校に学年便りをもらえるようお願いし、等身大の子ども達の様子を知ることができました。今年になり、小学校最後の運動会、親子会、修学旅行、学習発表会と、最高学年の最後の年を過ごしている様子を知る度に、自分達は確実に別の世界を生きていると感じました。私の息子は一年生のまま。私が見た秋の学習発表会も一年生の「くじらぐもにのって」。今年は二年生のはず…。「去年は」、「去年は」という思いというか錯覚は、季節や行事の度に、毎回自分の心の中で繰り返されてきました。何の前触れもない、予想もしていなかった息子の死、まさか、自分の息子が交通事故で命を奪われるなんて夢にも思っていませんでした。いなくなった現実をいまだに受け入れることができません。いつもこの秋が来ると、もうすぐ赤ちゃんが生まれる喜びと不安の日々、赤ちゃんが生まれてからの子育ての思い出が頭

の中を駆け巡ります。正座していると、時々、赤ちゃんを抱いて子守していた頃のように、「七つの子」を口ずさみながら自然と自分の体がゆっくり揺れている時があります。五十センチだった息子も、わずか七年で、自分の腕からはみ出るほどあっという間に大きくなりました。これからもどんどん上に横にと大きくなっていくものだと、そして明日が当たり前にやってくるのだと思っていました。普通のいつもどおりの今日だったあの日、まさかあの日の朝、いつもどおりに「行ってきます」と家を出て、恥ずかしそうに二度振り返り、手を振った姿が息子との最後になるとは夢にも思いませんでした。

事故は、みんなが普通に通る生活道路で起きた、予想もしなかった事故でした。

平成十七年、十一月二十八日の十五時四十分、あと家まですぐの県道交差点を横断中、息子の進行方向右側から来た車の右前部ではねられ、ボンネットにあがり、フロントガラスにぶつかって、十七メートル飛ばされ、意識不明の重体でした。ブレーキ痕は無く、十四時間後の翌日早朝に意識が戻らぬまま息を引き取りました。

この加害者は、事故の一週間前にも二十三キロオーバーのスピード違反で捕まっていたというのでした。仕事はきつく、成績をあげるために車の移動時間を短縮させようと考えていたとも言っていました。あの日はもうすぐ十二月だというのにこの時期には珍しい、朝から太陽が眩しく、暖かな良いお天気で、色に例えると黄金色の景色の一日でした。日が暮れるまでにはまだ早い時間。じゃあなぜ…。あの日、父から事故の知らせが入った時に電話の奥から聞こえてきた息子の泣き声は、今でもはっきりと耳に残っています。しかし、私が現場に駆け付けた時には青白く、呼吸もしていませんでした。事故直後に通りがかった看護師さんが気道の確保をして下さったのでした。息子は手術をし、たくさん

の器械をつけ、懸命な治療が続けられましたが、もう目を開けることはなく、それからは本当に何もかもが生き地獄のようでした。突然の息子の変わり果てた姿、何が何だかわからないまま次から次へと人が訪れ、十分な息子との時間もないまま葬儀屋の指示通りに仏事が進んでいくのでした。その一方で、なぜこのような事故が起きたのか?二十四時間以内の死亡事故なのに、なぜ加害者は逮捕されないのか?なぜブレーキの痕がなかったのか?加害者はどうなるのか?何か情報がある度に、警察から連絡が入るものだと思っていました。しかし何の情報も入ってこないため、何度もこちらから足を運んだりしましたが、今は調査中と言うだけで、明確な答えを得られませんでした。どうして自分の息子のことなのに知ることができないのだろうとイライラや焦りが続きました。また、目撃者を探しても見つからない。私達は突然の出来事に頭も心も追いつかず、冷静ささえ見失っている混乱した状況の中で次にどうなるのか?どうしたらいいのか?当然、刑事事件の手続きの流れなどわかるわけもなく、どこに、また、誰に頼り、何から相談したらいいのか、助けてくれるところもなく、まるで、真っ暗な海の中に放り投げられ、もがき苦しむかのような日々でした。また、自分の身に何が起きているのか理解できないそんな中、検察庁や警察署に出向き、法的なことが進んでいくのでした。裁判で加害者は禁固六カ月執行猶予二年という無罪同様の刑を言い渡されました。私達は到底納得できませんでした。さらに加害者は、裁判所からの帰り道、交差点を横断中、奥さんに話しかけながら笑って歩いていたのです。刑が軽くて良かったと思ったからなのか、終わって良かったと気が緩んだのか、何で笑っていたのかはわかりません。加害者の笑顔を私達が初めて見た瞬間でした。人の命を奪っておいて、裁判直後に笑えるという心境がとても理解できず、私達は馬鹿にされ、

頭から水をかけられたような気持ちでした。しかし、加害者が笑っていて、心から反省していないと抗議しても、裁判はやり直しすることはできるわけもなく、加害者の一人勝ちのように思い、何をしても救われない息子の命は、毎日のように起きてしまう交通事故の中の一件にすぎないと扱われたのだと悔しさと無念でいっぱいです。加害者は転勤し、自分の過去を知る人のいない土地で普通の暮らしに戻っています。また、免許を取得したと聞き驚きました。よくハンドルを握る気持ちになれたものだと、ここで加害者と被害者の心の回復の違いを強く感じました。私の個人的な意見として、交通事故を起こした人間は、例え二週間でも、一カ月でも、一度は刑務所に入り、自分の罪と向き合い考える機会があったほうが良いのではと思うのです。刑務所に入らなくて良かった、刑が軽くて良かったではなく、なぜこのような事故が起きてしまったのか、また、何に対して反省するのか、人の命の重み、大切さと向き合う時間が必要だと思うのです。裁判が終われば終わりではないのです。

私は、何を目標に、どう生きることがいいのかわからないまま今日まできてしまいました。唯一支えになったのは命日に訪ねてきて下さった方々や、事故現場に「ずっとわすれないよ」「ずっと一緒だよ　友達だよ」と書いた手紙を添えてお花を手向けて下さったお友達、中には名前が無く、お礼が届かず心苦しい次第ではありますが、心から感謝しております。また、誕生日やバレンタインデーに来てくれたお友達、同じ学年だった子どもさん達から思い出の手紙や絵などの作品を頂き、特に思い出を読むと、私の知らない息子の様子を知ることができ、うれしかったです。一日も長く人の心に生きてくれたらと小さく願っています。

昨年、命の大切さ学習教室で私のお話を聞いてくれた五年生の子どもさんからとても心

に残る言葉をいただきました。
「私は生きている　今日は、亡くなってしまった人がどうしても生きたかった明日です」
その手紙を読んだ時、いろいろなことを考えさせられました。私は子どもの頃、亡くなった母から「いつ、どんな時でも笑顔でいるように」と教えられました。忠実に守ってきたつもりです。しかし息子のいない現実を生きるということは、あまりにも辛く、厳しく、一グラムも昨日より気持ちが楽だったという日はありませんでした。同じ歳の子どもたちの成長や、息子がいた頃と変わっていく街や建物、今でも変わらない息子の部屋のあいうえお表や一年生の漢字表、心が現実に追いつけず混乱し、自分達だけがあの日に立ち止まっていると思いました。この言葉にならない苦しみから解放されたいと思う時もありました。しかし、その子どもさんの手紙の言葉を心に思い返し、自分を通して、雄宇也にも目から見えるもの、耳から聞こえるもの、感じるものを生きて届けたいと思いました。そして今日を無念にも生きることのできなかった雄宇也のために、雄宇也の命を生かしてあげられるよう、お母さんを頑張っていくのだと思いました。
雄宇也、雄宇也はいつも甘えん坊で泣いていたね。空手からの雨の帰り道、雄宇也にどうして雨が降るのかと聞かれて、お母さんは、月にはうさぎさんがいて餅つきしている話を聞かせて、雨はそのうさぎさん達の涙なんだよと教えたよね。十一月の雨の夜、雄宇也は「今日、うさぎさん、何悲しいことあったのかな?」と心配していたね。
雄宇也はだんだん大きくなって泣かなくなったね。みんなは六年生になったけど、お母さんは雄宇也の今の姿を想像することができなくなって、元気だった頃の姿しか思い出せなくなってしまったよ。雄宇也、お母さんは雄宇也に会いたいよ。

五回目の春がすぎた今

匿　　名

あのころ一年生だった孫は六年生になりました。心も体もびっくりするほど成長しましたが、学校から帰るとすぐお友達と遊びます。お腹が空いているので食べてから宿題や一人勉強、読書をします。お手伝いも私がお願いするとしてくれます。

野球が大好きなので頑張ってきましたが、六月の学童大会で負けてしまいました。七月の一区の大会も負けました。今は四～五年生だけ練習試合が出来ますが、六年生は参加できませんので、今はグランドで友達と野球をして楽しんでいる毎日です。

休みの日は家で友達と遊ぶこともよくあります。多い日は十人ぐらい来る時もあります。

九月には修学旅行に函館まで行ってきました。旅行に行くまでは、孫なりに悩んでいたようです。旅行から帰って、楽しかったのと、ホッとした様子でした。夜はちょっと恐くて眠れなかったようです。

孫は、母を亡くして寂しい日々を送ってきました。

私も思い出すたび、写真を見ては涙ぐむ日々でしたが、やっと思い出の写真を飾るようになりました。

娘は明るい、やさしい、芯の強い、頼れる、大切な子でした。

後で警察の方から聞かされたことには、加害者には借金があったそうです。自分で作っ

た借金で追い詰められ、仕事も辞め、自分で死ぬつもりで車に練炭を持って場所を探したが、自分では死ぬことはできなかったと聞きました。

自分では死ねないのに他人は殺せるんだ。とんでもない。娘は信じて付き合っていたのにどうして、なにも悪くないのに殺すの。なぜ？娘が死ななければならないの、加害者の借金のために…。

加害者に聞きたい。でも、二度と顔も見たくないし、会いたくないです。

残念でなりません。

娘は仕事も一生懸命、自分ができる限り頑張っていて、子どもも自分の手で育て、成長を楽しみにしていただけに娘もくやしく、心残りだったのではと思います。

孫は時々、「お母さん、どんな所にいるのかなー。死んだらお母さんに会えるかなー。死後の世界はどんな所か、見てみたいな…。」

そんな孫を見ていると悲しくなります。

無理とは分かっていても、娘を返してほしいです。

娘の被害から学んだこと感じたこと

三浦芳子

平成十三年四月二十日、大学から自転車で帰宅途中の娘芳代子（かよこ）は、青信号の横断歩道上で左折の十トントラック運転手によって命を奪われました。事故の原因は、運転手のわき見運転によるものです。日頃から安全意識もしっかり持ち何事にも慎重な娘が、まさか事故で命を落とすとは想像もしていませんでした。安全だと思っていた信号機がある横断歩道上であっても、命を守れる保証はどこにもないのだと初めて実感しました。「車に気をつけて」と言うことはあっても、「運転手がよそ見していないか気をつけて」とは一度も言ったことはありませんでした。今となっては後悔ばかりです。

事故直後から、悲しみの中で刑事裁判や民事賠償等に関わり、知識も情報も何もない私達家族は大きな不安を抱えながらもたくさんの体験をしました。

事故に関する加害者の証言に納得せず、どうしたら本当の事を知り得るのかと悩んだ時もあります。刑事裁判では交通事故の刑の軽さにショックを受け、民事賠償では娘の人権が無視されたと感じました。何をしても喪った命は元に戻りませんが、せめて加害者には本当の事を話してもらいたいし、心からの謝罪と償いの気持ちをもって欲しいと強く思いました。

娘を喪った当初は誰も信じられず、社会が

皆敵にさえ思いました。どんどん孤立し孤独になり、心の中で「誰か助けて…」と叫んでみたものの、実際にはどうすることも出来ませんでした。混乱するばかりで生きる気力もなく、様々な感情に押しつぶされ心身ともにぼろぼろになってしまっていたのです。すべて自分の身に起きているのに受け止めることも出来ず、他の被害者遺族がどんな気持ちで過ごしているのかを知りたいとも思いました。しばらくはそれも叶わずに、ひたすら被害者に関係する本を読みあさって過ごしました。被害者遺族達の心情や喪失感といったものを自分と照らし合わせ、頭では少しずつ理解出来るようになっていったのを覚えています。しかし本にすべてを頼れるわけでもなく、後に多くの遺族達との出会いがあり、大きな支えになりました。これまで多くの人に支えられ、今更ながら人と人のつながりの大切さを身にしみて感じています。

あの日から九年半が経ちました。毎年巡ってくる命日は特に辛いです。春を迎える四月は芽吹きの時季であり、生き物たちの生命力を感じるものですが、娘を喪ってからはとてもそういう気持ちにはなれません。二十才の若さで未来を断ち切られた娘の無念さを思うといたたまれなくなります。今年三十才になった娘の仲間からは、結婚したり出産したりと、うれしいお知らせが届きます。娘にもこんな人生があっただろうに、と思わずにはいられません。日々何かにつけて娘を想い、「こんな時芳代子がいてくれたら…」、「芳代子ならどう思うだろう…」等々、本人がいない寂しさや辛さは何年経っても埋められない、どうしようもなく大きな心の穴です。

心に抱える問題はやっかいで、何年経っても簡単に癒されるものではないです。受け止められない戸惑いもありますが、一歩一歩折り合いをつけて生きていくしかないと思っています。

毎日のように交通事故犠牲者を生み出す

車社会、犯罪に巻き込まれて命を奪われるニュースを見聞きするたびに気持ちが乱され、他人事とは思えなくなりました。誰もが被害者・加害者になり得るかも知れないのです。娘を喪ってからたくさんのことを学びました。学びが娘の犠牲の上にあるのは悲しいことですが、娘の死を無駄にしたくないと思っています。積極的な活動に至ってはおりませんが、被害者を支援したり、あるいは色々な場で体験を聞いて頂いております。

その中のひとつに、平成二十年から開催された「命の大切さ学習教室」があり、私も中高生に体験を話す機会を頂いております。「命って大事だよ」の娘の声に後押しされ、「娘と同じような犠牲者を出さないで欲しい」「未来ある若者が被害者にも加害者にもなって欲しくない」と願いながら話しております。その都度手紙（感想）を頂きますが、生徒達の素直な気持ちが感じられ、私自身が励まされ勇気をもらうこともたくさんあります。

皆さんのまわりに被害者はいませんか。被害を受けた原因も状況も多種多様ですが、それぞれの全容が必ずしも解明されるとは限りませんし、被害者やその遺族達の苦悩は計り知れないのです。被害者は可哀想だ…と遠くから見ていないで、寄り添って話を聞いてあげて下さい。「交通事故だから仕方がない」とよく言われますが、殺人など故意犯の被害者と比べないで下さい。奪われた命の重さは同じです。「いつまでも悲しんでいないで…」「がんばれ」等と励まされても、簡単にそういう気持ちにはなれません。被害者理解は難しいかもしれませんが、わかってもらえない辛さや誤解を受けて孤立しないように配慮して頂きたいです。

美貴・真美

匿　　名

娘は、二十一歳と十九歳の姉妹です。対向車線をはみ出して猛スピードで走行してきた車に追突されて亡くなりました。男兄弟の中で育った私にとっては、二人の娘のこれからが楽しみでいっぱいでした。ショッピング、旅行、結婚、出産、さまざまな幸せが、将来にはありました。今は、「ごめんね。お母さんが守ってあげられなくて。」と、繰り返す毎日です。

テレビのニュースでしか知らなかった「被害者遺族」の文字が、今は自分のことになりました。何が起きたのか、本当に事故が起きたのかを受け止めるまでに時間がかかりました。今でも現実と受け止められないことがあります。周りの人達が自分を特別な目で見ているようで、外にも出られず、家にこもる日が続き、性格もひねくれて、どうでもいいようになり、何に対しても投げやりな気持ちになりました。

交通安全は、一人一人の自覚はもちろんですが、それでも起きてしまうのが事故です。運転免許を取るのが当たり前の今、運転と命とは隣り合わせに居ることを忘れないでほしいと思います。

事故から三年が過ぎても子ども達の友達が来てくれます。ありがたい気持ちになります。「子どもが生まれたよ。」と連絡してくれたり、娘が好きだったキティの小物を持ってきてく

れたり、かわいい花束を持ってきてくれたり、たくさん話をしていってくれます。帰ってしまうと急に寂しさや苦しさが込み上げてきますが、毎回、毎回、ありがとうという気持ちでいっぱいになります。

命を大切にすることはきれい事では伝えられません。命は一度しかなく、死んでしまったら、姿、形がなくなったら寂しいし、その辛さは一言では言い表せません。周囲の人は私に、娘は心の中に生きていると言います。もちろんそうではありますが、違うように感じます。本当は、やはり一緒に笑ったり泣いたりしたいのです。娘と過ごしたのは、ほんの二十一年、十九年です。娘が生まれてからいなくなるまで、私は母親として未熟だったかもしれませんが、体当たりで二人を育てて来たことは、後悔していません。本当は後悔ばかりでしたが、そう思わなければ生きていけません。子ども達には、「私のもとに生まれて来てくれてありがとう。」と言いたいです。

最後に叶うなら、もう一度「お母さん」、「お父さん」と呼んでほしいです。姿を見せてほしいです。一度でいいから。

命

堀　江　まさ子

平成九年十月三十日、朝八時ころ、娘の麻衣子は自転車で登校した筈でした。年が明けて三月三日の卒業まであとわずかの高校生活でしたが、交通事故に遭い亡くなりました。

三人兄妹の末っ子、兄二人とも三つ違いの兄妹。小学校、中学校、高校の卒業、中学、高校、大学の入学も一緒で、夫と手分けして出席しました。忙しかったけれどとても充実した日々でした。ケンカもいっぱいしていたし、転げ回って遊び、泣いたり笑ったり、そばで見ている私は幸せでした。どの子も生まれてきてくれてとてもうれしかったし、宝物でした。皆優しく育ってくれました。特に娘は大きくなるにつれ、私のことを理解し、力になり、親子が逆転している時も多々ありました。「お母さん、私もっと英語勉強してみたい。外国にも行ってみたい。四年制の大学は入れないと思う。だから短大に行きたいんだけど。」とささやかな夢を語っていました。対等に話が出来るようになった娘に私は支えられ依存していました。

それがあの日。

「お母さん行ってきまーす。」

「行ってらっしゃい気をつけて。」

「あっ、忘れてた。今日はＰＴＡだったんだ。来るでしょ。」

「えー、何時から？」

「忘れたけど、あったんのお母さんに聞い

て。」
「ダメ。麻衣子が学校から電話ちょうだい。」
「じゃーね。」
と言って娘は行ってしまいました。電話するとは言いませんでした。それが娘の最後の「声」「言葉」になろうとは思いもよりませんでした。
しばらくすると、近くで救急車のサイレンが鳴りました。私は病人でも出たんだろうかと思いましたが、あまり気にも留めずにいると近所の方が家に来て「今、麻衣子ちゃんが救急車で運ばれて行った様だ。」と知らせに来てくれたのです。私はとっさに「自分で救急車に乗って行きましたか?」と聞きました。軽い怪我かなと思ったからです。するとその人からの返事はなく、深刻そうな顔になりました。私は、体がガタガタと震え出し、立っているのがやっとでした。夫はバスの運転士です。乗車中だろうかと思いながら、会社に電話を入れるとやっぱりそうでした。夫は遠くに行っていたので、交替してなるべく早く戻らせるようにしてくれると言ってくれました。長男は秋田市に通勤していますので、秋大三年の二男も車に乗せて気をつけて帰るように伝えました。私と義父は、病院に向かいました。車で十分程かかりますが、二人とも運転は出来そうになかったので、隣の奥さんに送っていただきました。
病院に着いてもなかなか娘に会えませんでした。何分、何時間待ったか分かりません。時間等全く記憶にありません。ようやく会えた娘は、ベットの上で人工呼吸器を付け、管を何本も付けられて横たわっていました。ただ左手と左足を動かしていました。その動作は、左手を挙げ自転車をこいでいる姿でした。そう、横断歩道を渡っているのです。右手でしっかりハンドルを握り、左手をしっかり挙げてペダルを踏んで渡っていたのです。私は、その手と足をさすり、名前を呼び続けました。すると、私の声が聞こえ安心したのかその動

きが止まりました。やがて、夫、長男、二男が駆けつけました。ただ皆呆然として何が起きたのか理解できないようでした。

夫と私が担当医師に説明を聞くことになりました。私は途中で具合が悪くなり、長男と祖父が代わりに行きました。検査の結果、頭を強く打ち、意識不明と言うことでした。近所のおばあさんに車ではねられたのでした。

それから、五十七日間、私たち五人は病室で過ごしました。夫と長男は、病院から会社に行きました。日中は私と二男が、夜は皆交替で娘が目覚めるのを待ち、先生の言葉に一喜一憂しながら、泣きながらの毎日でした。私は、お日様が出ると「どうか娘を助けて下さい。このままの姿でもいいですから、助けて下さい。」と手を合わせ、夜はくじけそうになり、「これでも母親？何もしてやれない。力にもなれない。あんなに娘に力になってもらいながら、自分は守ってやれない。」と情けなくて可哀想で涙が止まりませんでした。夫は、いつも静かな人ですが、「今まで事故もなく頑張ってきたのに、どうして俺の娘が、何故麻衣子なんだ。」と悔し涙を流し、長男は「麻衣子、兄さんの手見えるか？見えるよな。その手絶対離すなよ。」と手を握り、二男は、「麻衣子、ギター教えてやるよ。だから、早く起きろ。」と明るく語りかけ、イヤホンで洋楽を聴かせ、学校の話をしてやり、年頃の妹の足になど触ったことなどなかっただろうに、脳に刺激を与えるには足の指がいいとお医者様が教えてくれたと言って、一生懸命マッサージをしているのでした。十二月二十四日は、クリスマスイブです。娘のいとこ達、叔父、叔母達がケーキとプレゼントを持って来てくれました。看護師さん達も何人か来てくれ、「麻衣ちゃん、プレゼントいっぱいもらったね。」「看護師さんね、麻衣ちゃん起きたらラーメンおごっちゃう。」等と言っていただき、クリスマスソングを歌い、楽しく過ごしました。やがて皆さんが帰り、十一

時過ぎだったと思います。私達は床につきました。ウトウトしてスーッと眠りに入ったのでしょう。看護師さんの「お父さん、お母さん、麻衣ちゃんが…。」の声に飛び起きました。明けて十二月二十五日午前二時五十五分ころ、娘は静かにたった一人で遠い所に逝ってしまいました。

家に帰り、決められたことがあっという間に過ぎ、静かになると「お母さん」と呼ぶ娘の声。雨の日も「お母さん、麻衣子だけど迎えに来て。」という電話の声。「お母さん、兄さんが『肌色のブーツ履いて家に入っちゃだめ。』って言うの。私、何も履いていないのにー。」と甘えた声。決して美人じゃないけどいつも笑っている可愛い顔。その声が、笑顔が、姿がどこにもないのです。狂いそうになるほど泣きました。すると長男が「母さん、オレ達も必ず麻衣子の所に行くんだよ。麻衣子は『こっちだよー。』って迎えに来るよ。そしたら会える。その時を楽しみにしているよ。」と言ったのです。また二男は、「母さん、オレが死んだ方がよかったな。男は兄さんがいるし、女の子一人だけだったから、そしたら母さんそんなに泣かなくて済んだのに…。」と言ったのです。私は、二十歳を過ぎた二男を抱きしめていました。息子達も妹を失い、母を気にかけ、こんなにも傷付いていたことを知りました。私は自分のことだけで精一杯だったのです。しかし、今まで大切に育ててきた娘は、何も悪いことなどしていないし、友達も大事にしていたそんな娘が、かけがえのない娘が、他人の不注意で命を絶たれたのです。私達が築いてきた、しっかりと真面目に生きてきた人生が、生活が、根底からくつがえされたのです。胸が張り裂けるほどの苦しみ、悲しみと目覚めとともに襲ってくる虚しさ、何もしてやれなかった後悔で、誰もいない所でもがき苦しんでいました。

あれからもう十三年になろうとしています。今は表面には出せないけれど思いはまだ

続いています。一生消えることはないでしょう。あの、十八歳だった娘が生きていれば、三十一歳、結婚も、子を持つ幸せも絶たれてしまったのに、おいしいご飯をいただき、たまにお出掛け等をし、生きていることさえ娘に申し訳なく後ろめたい自分がいます。こんなに苦しんでいる母さえ生きているんです。あの娘がいないというのに…。

娘がいた頃の普通の生活のなんと幸せな事か。あの頃に戻れたらと、いまだ進歩のない母です。

平成22年度
犯罪被害者週間「県民のつどい」
犯罪被害者等の手記

平成22年11月

〒010-8570　秋田県秋田市山王四丁目１番１号
秋田県生活環境部県民文化政策課
〒010-0951　秋田県秋田市山王四丁目１番５号
秋田県警察本部警務部警務課
〒010-0001　秋田県秋田市中通五丁目１番51号
社団法人　秋田被害者支援センター